

2台ピアノの夕べ

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ二重奏作品全曲演奏会

ラファエル・ゲーラ & 掛谷勇三

RACHMANINOFF

PIANO DUO

PIANO

RAFAEL GUERRA & YUZO KAKEYA

2016年4月5日(火) 19:00 開演 東京文化会館小ホール 入場料: 一般 4000円 学生 3000円

マネジメント: ヤタベ・ミュージック・アソシエイツ Tel. 050-3636-9240

セルゲイ・ラフマニノフ ピアノ二重奏作品全曲演奏会

ロシア狂詩曲

交響的舞曲 作品 45

2台のピアノの為の組曲 第1番 作品 5

2台のピアノの為の組曲 第2番 作品 17

演奏：ラファエル・ゲーラ & 掛谷勇三

2016年4月5日(火) 19:00 開演

会場：東京文化会館小ホール

入場料：全自由席 一般 4000円 学生 3000円

チケット取扱い

東京文化会館チケットサービス Tel. 03-5685-0650

e+(イープラス) <http://eplus.jp/>

ヤタベ・ミュージック・アソシエイツ Tel. 050-3636-9240 E-mail: ticket@y-m-a.com (24時間受付)

お問い合わせ：ヤタベ・ミュージック・アソシエイツ Tel. 050-3636-9240 (月～金 10:00～18:00 土日祝休業)

※未就学児の入場はご遠慮願います

ラファエル・アルフォンソ・ゲーラ

メキシコ北部シナロア州出身。メキシコを代表するピアニスト、ホルヘ・フェデリコ・オソリオに師事。その後、ニューヨークのマンハッタン音楽院にて、アルカディ・アロノフのもとで学び学位を取得。オハイオ州立シンシナティ大学の修士課程に進み、ピアノをウィリアム・ブラック、室内楽をジェームス・トッコ、サンドラ・リバーズに師事する。ニューオリンズ・ピアノコンクール第1位、ニューヨーク・コンサート・アーティスト・ギルド ファイナリスト、サン・アントニオ・ピアノコンクール委嘱作品最優秀賞を受賞。メキシコ、アメリカを中心にオーケストラとの共演、ソロおよび室内楽の両分野で活躍。1997年より活動の拠点を日本に移し、ソロリサイタルや室内オーケストラとの共演の他、アドリアン・ユストゥス、黒沼ユリ子、名倉淑子、平松英子、浦川宣也、加藤知子ら著名な演奏家達との共演でも高く評価されている。2008年度には客員教授としてフェリス女学院大学に招かれる。



掛谷勇三

東京都出身。1981年東京芸術大学音楽学部付属高等学校に入学。88年東京芸術大学器楽科卒業後渡米、約4年にわたりパイロン・ジャンス氏の下で研鑽を積む。1992年マンハッタン音楽院修士課程修了。1993年～95年ウィーンにてパウル・バドゥラ＝スコダ、今井頭両氏に師事。1995年津田ホールにてデビューリサイタル開催。以来、東京を中心にソロリサイタル多数開催。各誌で高い評価を得ている。2002年及び2015年A. スクリャービン作曲ピアノソナタ全曲演奏会を、2003年S. ラフマニノフ生誕130周年を記念してピアノ独奏作品及び2台ピアノ作品全曲演奏会を開催。愛知県立芸術大学准教授。



～2004年9月 ラファエル・ゲーラ&掛谷勇三 ラフマニノフ2台ピアノの為の作品全曲演奏会評より～

作曲家生誕130周年、没後60周年記念として、ラフマニノフの2台ピアノ作品全曲を、力感あふれる男性ピアニストのデュオでという企画。・・・ふたりのデュオ歴は不明だが、レヴェルが揃っていることと、それぞれの掘り下げが深いことで、破綻のない、迫力にみちたアンサンブルを生み出していた。前半は『ロシア狂詩曲』と『交響的舞曲』作品45で掛谷がプリモ。後半は『幻想曲―絵画』作品5と『組曲第2番』作品17でゲーラがプリモ。ふたりの美点は、デュナーミクの呼吸がみごとに揃うこと、ともにフォルティッシモが濁らないこと。兩人ともセコンドに回ったときの役どころをよく心得ていること。常設デュオでなくとも、本気で取り組む姿勢と底力さえあれば、よい結果が出ることを実証した一夜だった。／音楽の友 2004年12月号より

このコンサートには『ラフマニノフ生誕130周年&没後60周年記念2台ピアノのための作品全曲演奏会』という題がついていた。・・・最初の『ロシア狂詩曲』、バランスもほどよく、重厚な主題の中よりロシアの哀愁を十分に感じた。『交響的舞曲』、各楽章共に旋律の受け渡しの妙技は見事だ。繊細な流れの中に悲しさがあり、3楽章ではロシア的な響きの中の変化が面白い。二人の微妙に違う音色が、ここではとても効果的。『幻想曲絵画』、『舟歌』など聴きほれた。華麗なるロシア音楽が流れる。『復活祭』でも、きらびやかな音を柔らかな重厚な和音で包む。最後の『組曲第2番』、実にスケールの大きな演奏。最後のプレストでは、叙情的な細かな音楽をすてきに表現、最後のクライマックスも見事。ラフマニノフの2台ピアノの音楽がこのように楽しいということを十分に聴衆に伝えたのは、とてもよかった。実力と技術の高さがなければできない技であろう。聴きごたえのある演奏会であった。／ショパン 2004年12月号より